

# みょうが(普通)

## 栽培暦

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1年目	定植	落葉敷き込み	追肥		収穫			茎葉刈払い	
2年目	施肥	落葉敷き込み	茎追肥 間引き		収穫			茎葉刈払い	

## 栽培の特徴とポイント

植え付け5~6年で地下茎が混み合い品質低下、減収となるので、定植3年を目安に病害の発生がないことを確かめ生産力の高い株を選びながら別のほ場に改植する。みょうがは花らしいの紅付きが良好な物ほど市場性が高いため、落ち葉やカヤ等を圃場に十分に敷き込む。

水田での栽培は根茎腐敗病が発生しやすいので、排水対策の徹底を図る。

## 品 種

諏訪1号：長野県で改良された品種。除雪し春先より地温が確保できれば夏みょうがとして7月から(長野系)の収穫が可能

陣田早生：群馬県で改良された在来種、植え付け2年目以降は夏ミョウガとしての収穫が可能(カネコ)

夏みょうが(早生)と秋みょうが(晩生)に大別される。各地の在来種が、その立地や風土に適している場合が多い。

## 本ば管理

### 【1年目栽培管理】

#### 1 定植準備

腐植に富み保水力があり、排水良好なほ場を選ぶ。pH5.0~5.5の土壌を好み、これ以下の極端な酸性土壌では生育不良となる。生育適温は25℃前後で、西日など強い日射の当たらないところがよい。高温乾燥を嫌い、水田跡地は耕土が浅く夏場の乾燥が問題となる。水田跡で栽培する場合は排水を良くするために1アール当たり苦土石灰10kg、B M溶燐6kg、完熟堆肥200kgを全面散布し、深耕混和しておく。植え付けの10~15日前に高度化成4kgを施し、耕耘しておく。

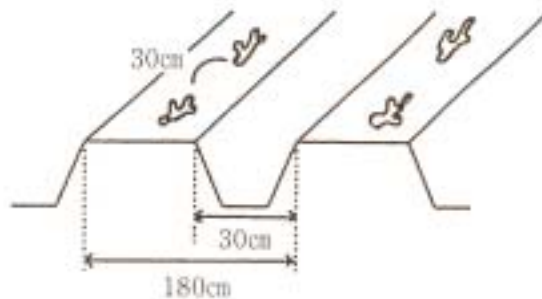


図 定植の模式図

#### 2 定植

萌芽前の春植えとし、1株2~3芽(長さ20cm)となるよう親株を分割する。アール当たり20kgの根株が必要である。畝幅180cm×株間30cm×1条植え溝幅30cmとし、5cm程覆土する。

ほ場の周囲に排水溝を掘り排水を徹底する。

6月中下旬に間引きした株を植える場合は、溝を深くし、ねぎを植える要領で定植する。

#### 3 定植後管理

落ち葉、萱(カヤ)等を約5~10cmの厚さに株元に敷き、雑草の発生を防ぐ。

萌芽後生長が旺盛になってから、追肥として1アール当り高度化成2kgを株間に施す。

### 【2年目以降栽培管理】

#### 1 施肥

基肥は萌芽直前に施し、追肥は本葉7~8枚頃とする。時期が早いと茎数が増え花らいが小さく発生も少なくなる。施肥量が多いほど花らい収量は多くなるが、病害虫等の発生も多くなるので注意する。

## 2 落ち葉等の敷き込み

萌芽し始めたら展葉までに花らしいの品質、着色向上及び土壌の乾燥防止のため、落ち葉、カヤ等を株元に厚さ5～10cm敷き込む。敷物の厚さが厚過ぎると花らしいが白くなるが、逆に敷き込み量が少ないと緑化した花らしいとなりやすく、雑草の発生が多くなる。

## 3 茎間引き

植え付け3年目以降、本葉6枚の頃に株間の間隔を13cm×13cm(60本/m<sup>2</sup>)になるように茎を抜き取る。5葉期以前の間引きは軟弱な分けつ茎を多発させるのでその時期に注意する。

間引きの効果として、初期収量や総収量の増加、花らしいの着色促進、1花らしい重の増加などがあげられる。

## 4 茎葉の刈払い

翌年の病虫害防除のため、茎葉が枯上がり次第その刈り取りを行い圃場外へ搬出する。

## 5 施肥例(kg/10a 当り)

肥料名	1年目		成分量			2年目		成分量		
	基肥	追肥	N	P	K	基肥	追肥	N	P	K
完熟堆肥	2000					1500				
苦土石灰	100					100				
BM熔燐	60			12		40			8	
そさいS1号	40	20	9	7.2	9	20	20	6	4.8	6
			9	19.2	9			6	12.8	6

## 病虫害防除

根茎腐敗病：初発生を見たら発生場所を中心に粒剤の土壌表面処理を行う。発病株は畑外に持ち出し処分する。排水不良地での発病が多い。

葉枯病：病害の発生前より予防防除を行う。

## 収穫・調製

### 1 収穫

花らしいの直径が1.5cm以上で開花前のものを収穫する。出らいから開花までの期間が短いので注意する。花が咲いたものは市場出荷せず、加工原料向けとする。

## 2 調製

落ち葉などを水洗で落とし、水切りを充分に行う。病虫害におかれたものや開花したものを除き、柄を1 cm以内に切りそろえて、形状、色沢等により選別する。

### 販売のポイント

- 1 出らいが一時期に集中するため、気象条件(標高等)や系統の特性を活かし収穫期間の拡大を図る。
- 2 除雪や融雪剤の散布など、春の萌芽を早めた出荷時期の前進化により、出荷期間の拡大を図る。